

## 高津区おはなしアーカイブ

加藤 歌子（かとう うたこ）さん  
昭和7年生まれ 82歳  
川崎市高津区下作延7丁目在住



### ◆住んでいた場所と家族構成

生まれたのは高津区下作延で、ちょうど今住んでいる家（現下作延7丁目）です。

もともと父親はこの地に住んでおり、母も近隣からお嫁に来ました。兄妹はおりませんで、家族は両親と私と3人でした。

明治生まれの両親は、辛抱強く、暑い日も決して暑いなどとは口にせず、ずっと畑で働いて帰ってくる、という家族でした。

一人娘だったので、ゆくゆくは婿を取って家を継ぐようにと育てられましたが、上の学校に行きたくて、「農家はいや」「農業はやらない」と言っておりました。「お嫁さんは大学を出て、背の高い人」と（笑）。

### ◆「歌子」と命名された理由

明治から大正期にかけて活躍した女子教育の先覚者。「実践女学校・女子工芸学校」創立者である、下田歌子さんにあやかりたいと「歌子」という名前をつけたのだと親からは聞いています。「女性として曲がった道に行かないように」という思いを込めてつけられたようです。

### ◆小さい頃の思い出

私が小さい頃に住んでいた地域には、もともと150軒位しかなく、周辺は山に囲まれ、田んぼと畑ばかりでした。どの家も農業で生計を立てるため、牛やヤギを飼い、農地を耕作していました。

幼少時の記憶で、いちばん鮮明なのは、南武線は蒸気機関車ばかり走っていたことです。立川から川崎まで通っていた南武線は、蒸気機関車はジャリやセメントを運んでいたのですが、石炭を入れて燃やすわけです。すると、下の方からものすごい煙が出るのです。私が4～5歳の頃かな、父と母が田んぼの中で一生懸命、作業をしているところに蒸気機関車が来るのです。田んぼは線路のそばでしたから、その蒸気機関車から出た煙の中に、両親がすっぽり隠れてしまいます。私は田んぼのあぜ道で遊んでいたのですが、その煙で父や母が見えなくなり、「あら～、いなくなっちゃった」と思いました。だんだんその煙がスーッと晴れて消えると、苗取りをしている両親の

姿が見えて安心したものでした。田植えの頃の5月は空気もおいしく、特にのどかでした。

両親が懸命に働く姿を見て育ってきましたが、女学校に行く頃には「あんな重労働は絶対にしたくない」って思っていました。

父は次男でしたから、そんなにたくさん田んぼがあるわけではないですけど、自分たちが食べる量くらいは充分賄っていました。それでも貧乏暇無し、いつも忙しく働いていました。

#### ◆小学校時代の思い出

小学校は高津小学校です。尋常高等小学校入学でしたが、途中から国民学校になりました。当時の同級生は、下作からは20人くらいいたかしら？

お教室は3クラスあって、男子が1クラス、女子が1クラス、そして男女組。私は一人っ子だったせいか、奥手だったからなのか、なぜか知らないけど、男女組に行かされました。お教室は、男子が手前側で、女子が奥。お教室に入るとき男子の横を通過して女子の席までいくことが、ものすごく恥ずかしかった記憶があります。

戦時中（6年生）、シンガポール陥落のときには、学校でゴム毬が配られました。当時はゴム毬1個買うのも大変だったのに、全員がもらえたのは嬉しかったわ。

小学生の時の遊びは、小さいゴム毬で、手毬唄を歌いながらよく毬つきをしていま

した。そして、今でいうと三輪車。ひとり1台なんて持ってやしません。お金持ちのお嬢さんが持っていて、それを交代で乗せてもらうのですが、そこで取り合いになるんです。今思えば、そのときのことが強く生きられる元だったかもしれませんね。「貸して」と強く言うこととか。それから「おままごと」。同級生でもお兄さんがいる人なんかは、ちょっと大人びていますからお父さん役。お母さん役はちょっと賢い人がして、私はいつもお使い役で。木の葉っぱのお金をもらうと、あそこに何か買いに行っちゃってと言われるの。私はそういう役目でした。

当時は多摩川まで砂利道で、小学校6年生まで1クラス1人の先生の引率で川まで裸足で行って泳いで、また裸足で帰ってくるんです。でも、だれも怪我なんかしませんでしたね。溺れもしないし。当時の多摩川は透き通ったきれいな川だったと覚えています。

学校への行き帰りは、見渡す限り田んぼと畑。下作延、中耕地あたりは平らで低い土地ですから、全部農地でした。小学校6年生くらいになってからは、畑で働いている親のかわりに、私がお風呂を炊くようになりました。当時は五右衛門風呂で、そのお風呂を沸かすのは私の役目。学校から帰ってくると、このくらいの時間なら親はあそこの畑にいるというのが見渡せるのです。両親は遠くにいても向こうで手をあげてく

れる。で、私がこっちで手を降れば、もうお風呂の支度はできているなと思って帰ってくる。すると母が夕飯の支度をして、3人で夕食という感じでした。

6年生の時に児童疎開があり、私は残留組となりましたが、間もなく終戦になりました。東北の方に集団疎開した友達が多く、別れが辛かったですね。



加藤さんの家周辺

〈昭和10年当時の下作延〉

#### ◆下作延の屋号について

屋号のある家は由緒ある家。下作延でも、昔からの旧家には屋号があります。

例えば上作と下作との境のところにあるお宅は「お仲居さん」というのです。本当は「お仲居屋」。今でも駐車場に「ナカイ駐車場」とついていますよ。昔は上作と下作ではお偉い方が休憩する所として「お仲居屋」でちょっと休んだということで。それで「御仲居さん」というんだって母が話

してくれたものです。

今、城山書道をやっているお宅は「名主前（なぬしまえ）」という屋号。昔、名主様がいたのでしょう、その前の家だったのでしょう。「今はなのしまえ」。

また、「おっこし」という屋号、それは渡辺家の新屋です。そこは分家で、一山越して、どっこいしょと越してきたために「おっこし」と呼んだそうです。母の妹はその「おっこし」に嫁いたので「おっこしの妹は」と、よく言っておりました。

#### ◆戦時中の思い出

小学生のときに、溝口の宗隆寺脇にある道、お宮の手前側の細い道のところに東京方面から低空飛行でB29が飛んできて、突然の機銃掃射に凄くビックリしました。民家の屋根と屋根の間に、見える空が全部飛行機の羽根に埋め尽くされ、下から空に急上昇して横浜方面へ去って行ったことを思い出します。

戦争中は、女学校に行っても、体操という体育の授業は、食糧増産のため、みんな農作業をやりました。運動場にはトラックがありますでしょ、トラックだけは残して、中は畑。そこを耕して、麦だとか大根など作るんです。私たちは肥やしを担いで、畑にまいたり、麦踏みしたりしました。そこで採れた野菜は、時折先生が帰りに袋に入れて持って帰っていたのを覚えています。それで、「え～そうなの～」なんて思ったり

しましたが、あの頃はだれも食べるものがほとんどになかったのでしょう。

当然、農家のお宅にも勤労奉仕に行きました。今でいえば王禅寺方面や菅など、遠くまで行きました。昼間だから、山のあぜ道を並んで歩いているのが、低く飛んできた飛行機から見えたんでしょう、バリバリと音を立てて機銃掃射されました。ちょうど山林から出る水を流すために溝が掘ってあったところに、全員で「白い服の人は下に伏せろ」と体を折る様にして横になりました。B29は一瞬で去り、先生が「みんな異状はないか」と。あのときはもう死ぬかと思いました。今でも忘れません。

津田山の東側のトンネルは昭和16年に出来上がったんです。平瀬川トンネルが出来上がる前は、川ではなく畑でした。多摩川へ抜けています。久地と下作をお互いに掘り進んで、つなげるときには爆薬を仕掛けて山を崩す。発破で吹き飛ばされ落ちてきた泥は、人夫がトロッコに積んで運び出しました。その土で、田んぼだった場所をみんな畑に変えていきました。

平らになった場所もサツマイモを作って、農家はそれを国へ供出したんです。サツマイモからは燃料がつくれるというので献納していました。

空襲警報が出ると、母と私、それからご近所の方、お嫁さんと子どもたち2人、4人くらいで、上の方からサツマイモ畑の間をザザっとすべり降り、防空壕の代わりに

トンネルへ避難しました。トンネルの真ん中は水で、両端には歩くところがあるので。空襲警報が発令されると、行李（竹や柳、籐などを編んでつくられた葛籠（つづらかご）の一種で、衣料や文書あるいは雑物を入れるために用いる道具。衣類や身の回りの品の収納、あるいは旅行用の荷物入れなどに用いられた。）と大事なものだけ持って、母とトンネルに入って行きました。

当時は近くに62部隊、高射砲部隊があったので、米軍はそれを狙ってきているはず。それで目標がずれて、円福寺さんと、農家の物置、私の家ともう1軒、全部で6軒焼けたんです。最後の空襲か、その前かな。昭和20年の4月。

私がトンネルから出てきたときは家の柱が真っ赤に燃え、柱が全部焼けてしまうと、草葺き屋根もバタンと崩れ落ちて火花が散ったりして、凄いものでした。

「でもいいよ、身体だけ残れば。お金はまた働けば出来るから。身体が3人とも無事で元気なのだから、出直せばいい。こんなことでくよくよしちゃいけない。これから出直すんだ。」という父の強い言葉が心に残っています。

家が燃えてしまったあと、父は3日くらいリヤカーの上に寝ていて、私と母は近くの本家へ1～2日くらい泊まらせてもらいました。お布団もないし、お茶碗もないし、お箸もないわけですから。全部焼けちゃって。

紋付きとか袴とか、普段使わないものは、母の妹の嫁ぎ先に蔵がありましたので、疎開しておきました。でも、毎日の着るものはすべて焼けてしまいました。

焼けた瓦礫を端っこに寄せ、平らになった場所にトタンを集め、バラックを建てて。父が6畳と4畳半と、屋根の勾配もちゃんとつけて。どこからかボロ畳も譲っていただいたのかな。お布団はみんな親戚からもらいました。父の兄や、下作に住んでいる親戚とか、母方の身内もだいぶ出してくれて、いろいろ恵んでもらいました。今思うと「感謝」の一念です。

その当時は、女学校1年生に入ったばかり。みんなの家は焼けてなくていいなあって羨ましかった。お友達が鉛筆とか消しゴムをくれました。筆箱も、昔は今のようないいものじゃなくてセルロイドのもので、壊れて放っておいたものをお線香に火を付けて穴を開けて、糸で縫い合わせて修繕するわけ。そろばんももらって。服ももらって、ずいぶんそのときは哀れだった。でも、もらわなければ生活出来ないのだから。

戦争は悲惨な記憶がいっぱい残っていて、13才の多感な時期だったので、ものすごく辛かったです。スカートもお古をいただいたの。それを毎晩、寝押しするの、するとこれはもらったものなんだ、母親から買ってもらった良いのは燃えちゃって。そういうのが悲しくて。バラックに住むってことも辛かったですよ。父や母は弱音も吐か

ずに頑張っていたけれど、私にしてみると、とても辛くて。私が働いて家を建てなきゃダメだ、と子供心に思いました。

その時とは別ですが、今中央町会に岩崎輝彌さんがいらっしゃるんですが、あそこのお宅もご兄妹を亡くされました。ゴルフのアルバ前にお地蔵様があるでしょ。あそここの芹田さんのお宅の裏あたりに爆弾が落ちたんです。

父と二人で御見舞いに行くとね、本当に酷いものでした。今は記念樹になっている木、大木の上の方に飛んできた布団が吊り下がっていたり、飛び散った肉が吊り下がっていたり、5歳くらいの小さい子の手が1つだけ下駄の上に乗せてあったり、ゴザの下には死体、今でも頭の中に鮮明に残っています。それはもう悲惨だったんです。

#### ◆終戦の日のこと

玉音放送を聞いたときは、なんだか夢の中みたいで。天皇陛下の静かな声を聞いたことくらいは覚えています。母が家にいて、先ず父にすぐ知らせなきゃいけないと思って私は畑まで一生懸命駆けて行きました。ラジオで「日本は負けた」って放送されたと言うと、父は信用せずに、真っ青な顔をして「そんなことはない、そういうことを言うてはいけない」とすごく叱られたことを覚えています。

## ◆高校卒業後

高津高校を卒業後、短大なら入れたのですが、上の学校に行くお金がありませんでした。「中学3年、高等学校3年で女学校に5年いくより1年多く勉強したのだから、もうお金を稼がないといけない」と思ったし。家も焼けてしまったのだから、父親の手伝いをしなくちゃいけないと自分に言い聞かせ、上の学校には行かず、お勤めに行きました。そこでお金を貯めて、上の学校に行こうと思っていたのですが、英語やら数学やら2年遅れたんです。勉強もすっかり嫌になっちゃった。それで洋裁を習いに上大崎の「杉野学園ドレスメーカー女学院」に入学しました。本科・師範科・デザイナー科を修了後、学院に残って助手をさせてもらいました。

本校の「杉野学園ドレスメーカー女学院」で助手をしていた頃は、周囲はみんな独身。でも私は結婚して家を継がなければならず、溝口のドレスメーカー女学院に転勤して、25年間お勤めしました。好きなことは楽しかった。

主人は、公立中学校の先生でしたから「公立の家庭科の先生になるように、大学に入ってもう1回勉強し直せば、教員資格も取れるよ」って、言ってくれましたが、そこまで勉強する気持ちもなかったんですね（笑）。

私たちの若い頃は洋裁がブームでしたから。ものすごい人気でしたよ。若いときは

洋裁店の仕事もずいぶんやりました。今でも教え子と行ったり来たりしています。私の一生の心の宝ですね。

## ◆ご結婚について

結婚は24歳のとき。夫は5つ年上で29歳。子どもは一人息子です。

夫は中学校の社会科の先生で背の高い方。中学時代のPTA副会長さんから薦められて、学校の先生だったら間違いのないと言われて、お見合いしました。ですけど、あんなに沢山お酒を飲むとは思わなかった（笑）。35年間勤務していた間、学校を休むことはなかったですよ。前の日どんなにお酒を飲んできても、朝になるとシャキッと起きて出掛けて行く。

両親も理解があり「農家の仕事はなにも手伝わなくて良い」と、「日曜日は身体を休めて明日の糧にしなくちゃいけないから、家の作業は手伝わなくても良い」と、とても理解がありましたが、本人は本当によく飲みましたね（笑）。

夫は13年前に亡くなりました。定年してすぐ、脳梗塞で倒れ、私は15年介護しました。ひとりで面倒をみるって、大変な事です。お婿さんを粗末にしたって言われたくないように、余計気を使って大事にしました。3回脳梗塞をして、最期は血管性痴呆もありましたが、優しい笑顔は最後まで絶えませんでした。

## ◆町会での役員経験

はじめて役所に行ったのは50年前。初めは体育指導員を20年。それと一緒に民生委員を12年。途中から重複していますが、その当時は元気いっぱいだったから、掛け持ちでも大丈夫。あと、町内会の会計を10年、監査を10年。全部で20年、町会役員をやっておりましたから下作延第一町会の歴史はほとんど知っています。

体育指導委員になったきっかけは、その頃、体力測定というのを市役所が中心になり行っていました。私は子どもをおんぶして、溝口の真ん中にあった東芝の体育館に行ったんです。そこで、後の体育指導委員長になる石塚さんが「赤ちゃんを置いとけよ、俺たち面倒を見るからやってみろよ」って言うてくださって。受けてみたところが、成績が良かったんです。それで役所の方から体育指導委員に誘われました。

時代が時代ですから、夫からは「女のくせに体育指導委員なんてやっちゃダメ。」と止められたんですけど、「それでも私はやってみたい」って言うと、「おまえがそういうなら行けばいい」と折れてくれて。20年間お手伝いをいたしました。

初めの頃は、親子運動会のポスターも画用紙に描いて、みんな3～5枚ずつおうちで描いて持って来っていうんです。それで男の人も女の人も一緒になって、いっぱい持ち寄った手描きのポスターを、自転車で坂戸方面、久本方面、溝口方面とか割り

当てて、みんな自転車に乗って鋸で張りに行きました。あの当時は若かったんで、相当頑張ってやりましたよ。非常に楽しかったです。今でも体育のOB会は年1回行っていて、昔ばなしに花が咲きます。

現在も町内会の防犯パトロールをしています。放置自転車や町会の街灯を点検して、切れているものは防犯部に報告する。集まるメンバーは佐藤忠さん、町会長さん、会計さん、防犯の人、女性が4～5人いて。

13～15人位が津田山の駅の前に集まり、駅から久地側に行くグループと、溝口側に行くグループとで午後7時に集まって、また8時に同じ場所に戻り、報告しあって「ご苦労様です」と解散しています。それは月末に1回、皆さんにお目にかかれるし、だいたいしんどくなりましたが、健康のためにもできるかぎり頑張ります。



(平成27年7月15日取材)